

教育実践報告

# 学生アシスタントを活用した教育方法及び教育効果

中村 純子

(A Report on Using Students as Teaching Assistants and Its Effects)

NAKAMURA Junko

## 要 旨

本報告は短期研修（留学）プログラムにおける学生アシスタント起用の教育効果を学生アシスタント、短期研修生の双方向から検証することを目的とする。学生アシスタントを活用し、教育効果を高めるためには、学生同士の交流を深めるプログラムの構築が重要であることが明らかとなった。今プログラムでは、双方が授業、活動に参加し、共通の目的で課題に取り組んだことで相互受容が可能となり、異文化コミュニケーション能力を高めたと考える。また、研修生にとっては日本人学生との交流で自然学習環境でのインターアクションの機会を得られることになり、日本語能力を高めるのに効果があったといえる。今後は更に交流を深めるプログラムの構築が必要である。

## キーワード

学生アシスタント    教育効果    短期研修プログラム    異文化コミュニケーション能力

## 目 次

- I. はじめに
- II. 学生アシスタントを活用した教育方法及び教育効果
  - 1. 短期研修プログラム背景
  - 2. 松本大学プログラム概要
  - 3. 学生アシスタントを活用した授業・活動の教育方法
  - 4. 学生アシスタント活用の教育効果—双方向から
  - 5. 学生アシスタント活用の教育効果を高めるには

III. おわりに

注

文 献

## I. はじめに

大学のグローバル化が叫ばれるなか、本学もグローバル化に向けて様々な取組みがなされている。その取組みの一つとして2015年より試験的に短期研修（留学）プログラムが始められた。そのプログラムにおいて、筆者は送り出しの大学では得られない機会を提供するために、松本大学学生を学生アシスタントとして授業、及び活動に参加させることを試みた。なお、本稿では学生アシスタントを「授業及び活動に参加し、留学生の日本語の援助及び、日本文化、社会に馴染ませるための援助を行う学生」と定義し、小林（2007）<sup>1)</sup>、伊藤（2008）<sup>2)</sup>らの「留学生個々に学生がついてその勉学や大学生活上の指導・援助をする」という「チューター」とは区別する。

チューター制度が留学生、チューター双方に様々な教育的効果をもたらすことは瀬口・出中（1999）<sup>3)</sup>らが明らかにしているが、一方で、問題点も小林（2007）<sup>1)</sup>らにより指摘されている。小林（2007）<sup>1)</sup>はチューターが個々の学生につくということで、性格、興味などのずれ、チューターの専門的知識の不足、チューター可能な時間の不一致等の様々な問題があり、マッチングの難しさを報告している。また、長期間にわたると、人間関係が築きやすい反面、逆に問題も生じやすい。

本学生アシスタントは、チューターと異なり、個々の学生に対してはわけではないので、マッチングに起因する性格、興味の不一致などの問題は生じにくい。また、授業は教員の指導の下に当たるので、専門の知識不足という面も問題にならない。また2週間の短期ということで、アシスタントの学生の負担は長期に比して軽減され、短期間ゆえに支援にエネルギーを集中しやすいことも利点である。さらに、チューターの多くが、授業での関わりを持たないのに対し、本学生アシスタントは授業にも参加し、関わることで、短期間ではありながら、より密接な人間関係が築けることが期待される。

本実践報告では短期プログラムにおける学生アシスタント活用の教育効果を学生アシスタント、短期研修生の双方向から検証し、今後の短期研修プログラムの構築に資することを目的とする。

## II. 学生アシスタントを活用した教育方法及び教育効果

### 1. 短期研修プログラム背景

松本大学は2014年度に中国嶺南師範学院と提携を結んだ。その提携に基づいた交流活動の一環として、互いに短期研修プログラムを開講して、短期研修生を交換する試みを行った。研修に参加した学生の人数及び期間の非対称性から、研修趣旨はそれぞれ異なる。松本大学における短期研修プログラム（以後、「松本大学プログラム」と呼ぶ）には嶺南師範学院の学生8名が参加し、研修中心に行われた。嶺南師範学院におけるプログラム（以後、「嶺南師範学院プログラム」と呼ぶ）は、本学の学生2名が参加し、交流、視察が中心であった。筆者は「松本大学プログラム」において日本語研修を担当し、さらに国際交流クラブの顧問として、活動も支援した。また「嶺南師範学院プログラム」では「松本大学プログラム」で学生アシスタントとして参加した2名の学生の引率、および嶺南師範学院日本語学科における日本語の講座を2回担当した。本報告では「松本大学プログラム」を中心に、学生アシスタントを活用した教育方法及びその教育効果を記述するが、「嶺南師範学院プログラム」についても、その教育方法、教育効果を記述する上で関係があると思われることにつき記述する。なお、ここでいう学生アシスタントは、日本語の授業、課外活動に複数回関わり、研修生の日本語学習を手助けした学生のことを指し、一回限りの課外活動に参加した学生を学生ボランティアと呼び、区別する。

### 2. 松本大学プログラム概要

「松本大学プログラム」は最初の一週間は午前の日本語研修と午後の活動及び一日のフィールドワークで構成されている（表1参照）。日本語研修は、嶺南師範学院の学生が母国では得られない機会—学生アシスタントと授業を通して、交流する—を供するようにシラバスを作成した。さらに、授業と活動にできるだけ関連性を持たせ、習得した日本語の語彙、表現などを実際に活用できるようにした。午後の活動、フィールドワーク等にも可能な限り学生アシスタント、学生ボランティアが参加するように促した。二週目の午前には専門の教員による「簿記」、「マーケティング」、「福祉」、「経済」、「食文化」の講義が行われた。午後は活

表1. 「松本大学プログラム」スケジュール表

日時	嶺南師範学院学生		学生アシスタント	ボランティア
	午前	午後		
2/1(日)		入国		
2/2(月)		入校式・歓迎会		国際交流クラブ 10名 他 2名
2/3(火)	オリエンテーション① 「他己紹介」 プロジェクトワーク② 「松本の町を歩き」準備	プロジェクトワーク③ 「松本の町歩き」	6名	
2/4(水)	プロジェクトワーク④ 「松本の町歩き」発表 「日本の就職」⑤ 「日本の伝統文化」⑥	茶道体験⑦	6名 (午前のみ)	茶道部有志 (午後)
2/5(木)	フィールドワーク⑧ 諏訪大社見学等	諏訪の企業の工場見学	2名	
2/6(金)	「日本の伝統文化、工場見学」⑨ 感想発表 「地域と国際」⑩ 波田国際交流クラブとの交流準備	「地域と国際」⑪ グループ発表準備 嶺南師範学院・嶺南地方・嶺南料理の紹介	7名	
2/7(土)		「地域と国際」⑫ 波田国際交流クラブとの交流会	7名	地域の方 約 30名 国際交流クラブ他 4名
2/8(日)	フリー	フリー		
2/9(月)	講義「簿記会計」 講義「マーケティング」	ラート経験	1名 (午後のみ)	ラート部有志
2/1(火)	講義「社会福祉概論」 講義「日本の食文化」	温泉及びそり体験	1名 (午後のみ)	
2/1(水)	フィールドトリップ 地獄谷野猿公苑	フィールドトリップ 善光寺見学	4名	
2/1(木)	講義「日本の企業」	フェアウエルパーティー	7名 (午後のみ)	国際交流クラブ有志他 (午後のみ)
2/1(金)	修了式	名古屋移動		
2/1(土)	出国			

動で構成されていたが、その活動にも有志の学生アシスタント及び学生ボランティアの参加を促した。以下が詳細である。

○研修名：嶺南師範学院「短期日本語・日本企業・日本語文化研修プログラム」(松本大学プログラム)

○研修期間：2015年2月2日(入国2月1日)～2月13日(出国2月14日)

○主な研修場所：長野県松本市松本大学

○研修参加者：・中国広州湛江市嶺南師範学院／

日本語学科学生3年生8名 引率1名

日本語能力 N2～N1

・学生アシスタント／7名(常時)

・学生ボランティア／国際交流クラブ、茶道部、ラート部、学友会執行部、中村ゼミ有志

○プログラム目的及び内容：日本語・日本企業・日本文化について理解を深める。

### 3. 学生アシスタントを活用した授業・活動の教育方法

本節は学生アシスタントを活用したプログラムの具体的方法を記す。なお、下記の①～⑫のプログラムは表1の同番号のプログラムに対応し、筆者が関わったプログラムである(茶道体験は除く)。席は学生アシスタントと嶺南師範学院の学生が交互となるようにした。なお、このプログラムの実施にあたって、受け入れ2週間前から、学生アシスタントの役割についてのオリエンテーションを開催、さらに授業開始前30分間、学生アシスタントとの打ち合わせ会を持った。

#### オリエンテーション①

目的：嶺南師範学院学生・学生アシスタント互いの交流

方法：学生双方の距離を近づけるために、嶺南師範学院学生・学生アシスタントがペアを組み、他己紹介で相手の好きな物を紹介する。

#### プロジェクトワーク「松本の町歩き」準備・活動②③

目的：・嶺南師範学院学生・学生アシスタント／タスクを共に行うことによる双方の交流

- ・嶺南師範学院学生／松本の町、日本文化を知ってもらう。
- ・学生アシスタント／嶺南師範学院学生を案内することにより、自らも地域を客観的に見る能力を養う。

方法：1) 学生アシスタント、担当教員が松本の町を事前調査し、タスクを作成する。

〈タスク例〉四柱神社の名前の由来を調査する。神社の参拝の仕方を調査する。

- 2) チームリーダー(松本大学総合経営学部観光ホスピタリティの学生)のPPTによる松本の町紹介(図1参照)
- 3) 2つのグループに分け、タスクを確認。グループごと松本の町歩きをしてそれぞれのタスクを行う。

#### 「松本の町歩き・発表」④

目的：・嶺南師範学院学生／発表の技術を学ぶ。学生アシスタントと話し合うことにより、日本語の技術とコミュニケーション

ンスキルを高める。

- ・学生アシスタント／日本語の文法、表現を適切に直すことを通して、日本語を客観的に見つめなおす。外国人の視点で見た松本の良さを知る。

- 方法：1) 講義により、発表の型を学習する。
- 2) 発表の型を利用し、グループごとに模造紙に結果をまとめる。学生アシスタントは日本語の文法、表現チェック。表現の仕方は各グループで話し合い決める。(図2参照)
  - 3) 発表は嶺南師範大学学生が行い、最後に学生アシスタントが一言ずつコメントを述べる。

#### 「日本の就職」⑤⑧⑨

目的：・嶺南師範学院学生／日本の学生の就職について知る。日本の企業について知る。

- ・学生アシスタント／日本の学生の就職について説明する。中国の就職について知る。

- 方法：1) 松本大学松商短期大学部2年、就職活動の経験のある学生アシスタントのPPTによる就職活動の紹介
- 2) 発表のリスニングタスクを行う。Q & A
  - 3) 工場見学をする企業についてホームページより、経営方針、採用条件などの事前学習を行う。
  - 4) 工場見学をして担当者にQ & A
  - 5) 工場見学の感想をまとめ、学生アシスタントが日本語をチェックし、発表。
  - 6) 感想を話し合う。(互いの国の就職事情について話し合いを持ちたかったが、時間の都合で割愛。)

#### 「日本の伝統文化」⑥⑦⑨

目的：・嶺南師範学院学生／講義、体験を通して日本人の美意識の中の1つとして茶道を考える。

- ・学生アシスタント／日本の伝統文化茶道を外国人学生の目を通して捉えなおす。

- 方法：1) 教員による茶道の歴史、作法、日本人の美意識についての講義
- 2) 茶道体験

- 3) 感想をまとめて、学生アシスタントが日本語をチェックし、発表。
- 4) 感想を話し合う。(日本人学生に嶺南師範学生の感想に対する感想を発表してもらいたかったが、時間の都合上割愛)

「地域と国際」波田国際交流クラブとの交流⑩⑪⑫

目的：・嶺南師範学院学生・学生アシスタント／地域の国際交流団体との交流  
 ・嶺南師範学生／料理の作り方の説明の仕方・大学・地域についての説明の仕方について習う。  
 ・学生アシスタント／発表原稿の添削を通して日本語を客観的に見る目を養う。嶺南地方、嶺南師範学院について知る。嶺南地域の料理について知る。

方法：1) 教員が料理の説明の仕方、大学、地域についての説明の仕方を講義する。  
 2) 3つのグループに分かれ、料理、嶺

南師範学院、嶺南地方についての説明のPPTを作成する。その際学生アシスタントが日本語をチェックし、発表のシミュレーションを行い、日本語の発音等のチェックをする。

- 3) 当日は嶺南師範学院学生、学生アシスタントともに必要な食材をスーパーで買い物。波田公民館で地域の方と料理を通じて交流。PPTによる嶺南師範学院学生による料理の作り方説明。地域の方も寿司、豚汁、おやきなど、日本食を作って提供。(図3参照)
- 4) 交流会。PPTを使って嶺南師範学院学生による嶺南師範学院、嶺南地方の説明。(図4参照)

#### 4. 学生アシスタント活用の教育効果—双方向から

上記のような授業、活動を行った後、学生アシ



図1. 学生アシスタントによるプレゼン



図2. 学生双方のディスカッション



図3. 地域との交流・交流会準備



図4. 地域との交流・嶺南地方紹介

スタント活用の教育効果を検証するために、嶺南師範学院の学生、学生アシスタントにプログラムに関してアンケートによる意識調査を行った。さらに、嶺南師範学院外国語学院日語系主任に嶺南師範学院学生の「松本プログラム」を終えて帰国してからの変化について調査を行った結果を記述する。

#### 1) 嶺南師範学院学生意識調査

以下は嶺南師範学院学生の「松本大学の学生と一緒に活動したこと」についてのアンケート結果である。一部日本語の添削をしてあるが、できるだけ原文のまま残すようにしたので、日本語がやや不自然な箇所もある。

松本大学の学生と一緒に活動、授業に参加してくれて、私たち8人だけより、リラックスできて、緊張感がなくなりました。日本に行ったら、日本人と友達になりたかったです。そして普段困ったことがあっても、彼らによく助けてもらいました。LINEとかでも、よく連絡した。帰国しても友達です。松本大学で勉強している中国人学生ともいい友達になりました。やっぱりみんな同世代ですから、趣味とか、買い物とか、食べ物とか、いろいろ話題があります。(A)

松本大学の学生さんと一緒に授業をしたり、活動をしたりして、日本の教育方法と日常生活習慣について大変勉強になりました。そして松本大学の学生さんといいい仲間になれたので、嬉しかったです。松本大学の学生と一緒に活動して、色々な日本語を勉強しました。松本大学の学生さんの支援のおかげで、日本の生活はたいがい問題ありませんでした。(B)

とてもよかったですと思います。松本大学の学生様と一緒にいいことを体験して、友達になって、2週間の思い出のほとんどを一緒に作ってきたことは一番いい体験です。(C)

よかったですと思います。楽しかったです。機会があれば、また一緒に活動、授業に参加したいです。(D)

楽しかったです。色々話すことが出来ました。趣味とか有名人とか、見学したとき、歩いたり、

話したりして、段々友達になりました。これからもお互いに連絡すればいいと思います。(E)

日本の大学の教え方と中国の大学の教え方はたくさん違うところがあります。まずは教室の中での座り方です。中国の教室はデスクといいますが固定して移動できません。でも日本の教室の机といすは固定していなくて、授業の内容とか形式によって移動できます。そうすればみなさんは授業の雰囲気に入りやすいし、よかったです。松本の学生さんと一緒に授業に参加して、仲間になって、いろいろ勉強して、とても楽しかったです。みんなやさしくて、優秀です。(F)

松本大学の学生と一緒に活動、授業に参加したことは楽しかったです。何か分からない時、学生たちは説明してくれて、ありがとうございます。それに皆さんはやさしいし、毎日笑顔をもってみなさんと過ごせて嬉しかったです。私たちの日本語はまだですが、皆さんは私たちの要求を聞いて、案内したり、説明したりしてくれました。本当にありがとうございました。(G)

松本大学の学生さんたちと一緒に活動できて本当によかったです。それのおかげで、いろいろな分からない点も聞くことができた。また、日本の生活に慣れるように助けてくださり、ありがとうございました。でも学生たちはこんな忙しい時も私たちと付き合ってください、申し訳ございませんでした。でも楽しかったです。(H)

このように、嶺南師範学院の学生は授業、活動だけでなく、日常生活でも学生アシスタントと交流し、支援を受けたことを高く評価している。そしてほとんどの学生が学生アシスタントを対等な友人として受容している点に注目したい。(H)は学生アシスタントが多くの時間を研修生のために割いて、支援、交流したことに感謝を表している。このような思いが「嶺南師範学院プログラム」に、本学の学生アシスタント2名が参加した際に、終始2名に付き添い、支援してくれたことにも繋がったと思われる<sup>註1</sup>。(F)は双方の交流を促した要素が、学生アシスタントの授業参加のみならず、席の配置にもあったことに気づいていた。

## 2) 帰国後の変化

嶺南師範学院の学生が「松本プログラム」を終えて帰国してからの変化として、外国語学院日語系主任が次の6点を報告してくれた。

1. 日本の社会や文化などの関心を持つようになった。よく学生たちに松本城や善光寺のことなど伝えている。
2. コミュニケーション能力を高めることができた。日本の友達をつくり、仲良くしている。今もよくインターネットなどで交流している。
3. ものの考え方も変わった。独自で問題を解決する能力を高めた。
4. 日本語を大胆に言えるようになった。
5. 日本語を正しく言えるようになり、その語気、語感などよくなった。
6. 松本大学留学をどこでも誇り、自慢としている。

これらはすべて学生アシスタント効果とは言えないが、何らかの影響は与えていると思われる。特に2は学生アシスタントを活用したことと直接関係しているといえるだろう。やはり同世代効果は大きく、彼らはLINE等で現在も交流を深めている。

また4、5の変化も学生アシスタントとの交流により、教室談話だけではない意味交渉の補充が可能となった結果によると思われる。第二言語習得理論においては意味交渉に重点がおかれたインターアクションの重要性が強調されているが、この学生アシスタント起用が、研修生にとって教室談話と異なる自然学習環境でのインターアクションの機会を与えたといえる。そしてこのインターアクションが既習のスキルの運用練習の場、認知面においては語彙、表現、運用の自動化を訓練する機会(村上、後藤、2006)<sup>4)</sup>となっていた。つまり、学生アシスタントの活用は研修生の日本語能力を高めることにも効果があったといえる。

## 3) 学生アシスタント意識調査

一方、学生アシスタントには、「学生アシスタントとしてどんなことを感じたか、何か意識の変化があったか」をアンケートで答えてもらった。

文化の違いを感じた。隣の国なのに全く違う点も多く存在していると思った。日本語が上手で驚

いた。(a)

日本と中国の文化の違い、共通の部分を学べた。(b)

文化が違うといことの面白さを感じた。知らないことを教えてもらい、自分の知っていることを教えるということは、相手への思いやりが必要だと感じた。そして自分でもできるという自信がついた。(c)

中国の方々が日本語を勉強していたおかげで、言葉に不便を感じなかったし、分からない言葉を漢字で書いてしまえば、だいたい通じるんだと分かった。(d)

国の垣根をこえて交流ができて、とてもいい体験ができた。外国の人とは全然コミュニケーションがとれないのが不安だったけど、そういうことはなくて、普通に話をしたりすることができたのでよかった。(e)

中国の学生さんのどんなことにも積極的に参加している姿をみて、自分も見習いたいと思った。自分の国について知らないことが多いことがわかったので、もっと知るべきだと思った。(f)

日本国内で一生過ごすのは狭くてちょっと味気ないと思った。これから就職活動が始まるので、自分の進路を改めて考えてみるいい機会になりました。(g)

文化の違い、文化の共通への気づき、さらにその違いを面白がる姿勢など、異文化コミュニケーションでなければ得られなかった経験が得られたことが分かる。(c)は、この研修後、「嶺南師範学院プログラム」に参加する予定の学生である。(d)、(e)は国境を越えて相手に向かいあい、相互理解のできたことで、このような感想を持つに至ったと思われる。ここでは異文化理解からさらに異文化受容へと意識が進んだ様子が分かる。(f)、(g)は生き方にも影響を与えた交流を持てたといえよう。また、自文化に対する認識の低さを自覚できるのも、このような異文化の人々とのコミュニケーションを通してこそである。

さらに、学生アシスタントに「プログラムの

よかったと思う点」をあげてもらった。そこには「2週間で日本についてよく知ることができるプログラムだった。中国の学生と日本の学生が協力できるプログラムだった。」「中国の人たちと交流できる時間が多かった。」「食文化、文化の交流があって、お互いのことを知ることができた。中国という異文化を体験することができてとてもよかった。」という意見が寄せられた。ここから学生アシスタントもこの経験をアシスタントというよりは、互いに学びあった経験と捉えていたことが伺われる。また嶺南師範学院の学生の視点で、「色々なことを体験して充実できていたようでよかった。内容が濃くてよかった。学びと遊びの両立ができたプログラムだった。」と感想を述べたものもあった。

改善が必要だと思う点もあげてもらった。「雑談とかする時があればもっといいかなと思った。」「時間が思ったより短かった。」「交流の時間が足りなかった。」という意見が寄せられ、さらに交流の時間を求めていることが分かった。「アシスタントがもっとほしかった。彼女たちは交流を求めている様子だったので、もっと交流の機会が欲しかった。」と、嶺南師範学院の学生の視点で改善点を指摘したものもあった。実際、プログラムの中で、学生同士のディスカッションの時間をもちたいと考えていたが、時間の制約があり、実現できなかったことがあったことは反省点である。

## 5. 学生アシスタント活用の教育効果を高めるには

以上のことから、学生アシスタントを活用し教育効果を高めるためには、学生同士が交流を深められることが非常に重要であるということが分かった。瀬口、田中 (1999)<sup>3)</sup>でも、留学生とチューターがよい人間関係にあれば、プラスの変化があることを指摘している。伊藤 (2007)<sup>2)</sup>は効果的な活動のためには留学生・チューター間で十分な意思疎通、共通認識が持たれる必要があると述べている。また、副田 (2010)<sup>5)</sup>も留学生が望むチューターの形として「友人関係が築ける」ことを全ての留学生があげていたことを報告している。

今研修プログラムにおいては、交流を深めるための環境がある程度整っていたといえる。研修の早い段階から授業、活動を通して学生同士がアカデミックなセッティングの中で、お互いを開示できたこと、さらに交流によって異文化理解、自文化

理解が可能になり、異文化コミュニケーション能力を高められたこと、研修が双方に時間的な負担の少ない短期であり、エネルギーが集中でき交流を深められたこと、また、一部の学生にとってはお互い短期プログラムに参加するという一方で、互惠の関係が成立していたことも人間関係構築にプラスに作用した要因であると思われる。そして何より授業、活動に参加し、共通の目的で課題に取り組んだ経験が、学生同士の距離を縮め、アシスタントと援助される側という立場を超え、対等な人間として互いを受容できたと思われる。

しかしながら、「松本大学プログラム」では詰め込みすぎた内容をこなすことに気を取られ、学生同士が話し合える場を十分に提供できず、学習の効果を深める活動に時間が割けなかったことが改善点である。今後はさらに交流を促し、深めるプログラムの構築に努めたい。

教育効果に人間関係が影響しているということは、学生アシスタントの意識も重要になる。今回学生アシスタントとして起用した学生は国際交流クラブに所属していたり、嶺南師範学院に交換留学を予定していたりする学生で、日頃から留学生と交流を持ち、国際交流に興味関心のある学生であった。そのため、国際交流に対する意識が非常に高く、それも大きな教育効果をもたらした要因である。学生アシスタントらのうち何人かは、自主的に夕食を共にしたり、買い物に一緒に行ったりと、授業時間以外でも交流を深めていた。また、嶺南師範学院の学生も交流に積極的な学生であったことも大きい。交流を促すプログラムの構築とともに、このような人材を育てることも、学生アシスタントを活用した教育方法の教育効果を高める上で重要となる。

## Ⅲ. おわりに

本報告は学生アシスタント活用した教育方法とその効果を中心に述べてきたが、このような短期研修プログラムでは相手校の短期研修に対するニーズを事前に知ることが今後の交換留学プログラムを構築する上で必要なことである。そのためには、相手校の研修生の所属学科のプログラム全体の把握、事前の話し合いが必要である。

## 注

学生アシスタントのうち、2名が松本大学代表团として嶺南師範学院に滞在し、中国文化、中国語について研修した。以下がその概要である。  
 プログラム名：「松本大学代表团来訪滞在プログラム」（「嶺南師範学院プログラム」）  
 来訪期間：3月4日～3月11日（滞在期間3月6日～3月11日）  
 研修場所：中国広州湛江市嶺南師範学院  
 研修参加者：松本大学2年生 1名 松本大学松商短期大学部1年生 1名  
 嶺南師範学院学生アシスタント：嶺南師範学院日本語学科学生 8名 + a

表2. 「嶺南師範学院プログラム」  
スケジュール表

日時	松本大学学生		*嶺南師範学院学生アシスタント
	午前	午後	
3/5(木)	日本出発		
3/6(金)		嶺南師範学院案内 松本大学研修プログラム紹介	嶺南師範学院日本語学科学生 7名 + a
3/7(土)	市内観光	市内観光	7名 + a
3/8(日)	雷州文化見学	雷州文化見学	5名
3/9(月)	日本語講座①	中国語研修 餃子パーティー	嶺南師範学院日本語学科学生 8名 + a
3/10(火)	日本語講座② フェアウエルパーティー	中国語研修	嶺南師範学院日本語学科学生 7名 + a
3/11(水)	中国出国		

\*嶺南師範学院学生アシスタントは「松本大学プログラム」に参加した学生8名が中心。授業にも通訳、または受講生として参加。

上記のプログラムすべてに松本大学に短期研修として滞在した8名がアシスタントの中心メンバーとして関わってくれた。出迎えから始まり、フェアウエルパーティーまで、終始付き添い、日本語通訳をしてくれた。この活動は日本語学科の学生にとっても日本語学習の実践の場として役に立ったと思われる。しかし、それ以上に、「松本大学プログラム」において学生同士の交流により友好関係を築けた結果の行動であったと考える。実際、嶺南師範学院の学生からは「松本大学でよくしてもらったお礼です。」というような発言が何度もあった。また、この研修に参加した松本大学学生は、「学生アシ

スタントをしていなかったとしても、歓迎はしてくれたと思うけれど、学生アシスタントをしたことで顔見知りとなっていたので、すっと入っていた。」と述べていた。

## 文 献

- 1) 小林浩明, 「チューター制度の改善と留学生アドバイザーング」『北九州市立大学国際論集』第5号, pp.53-62, (2007).
- 2) 伊藤孝恵, 「チューター活動と留学生相談室の支援—山梨大学の事例から」『山梨大学留学生センター研究起用』第3号, pp.3-11, (2008).
- 3) 瀬口郁子, 田中圭子, 「チューター制度の運用に対する提言—満足度と教育効果の観点からの一考察—」『神戸大学留学生センター紀要』第6号, pp.1-17, (1999).
- 4) 村上千智, 後藤倫子, 「自律学習のための試み：言語習得の場からの考察」『目白大学人文研究』第3号, pp.13-27, (2006).
- 5) 副田恵理子, 「短期留学生が望むチューター活動の形」『日本語教育方法研究会誌』第1巻, pp.58-59, (2010).